
米を炊く

唐務新斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

米を炊く

【Zコード】

N6732P

【作者名】

唐務新斗

【あらすじ】

米職人が、極上のコシヒカリで米を炊く。
それは至上の芸術と言つても過言ではない。

桐の簡素な米びつの中には、米があった。

魚沼産の最高級のコシヒカリである。

淡い照明に照らされたそれは、淡く、白い輝きを放つ。陸から生み出された真珠のようだ。

さく。

じゅらじゅら。

彼は、銀のボウルに米を注ぎ入れる。

その量は、きつかりと二合。

彼はおもむろに高山よりはるばる汲んで来た湧き水で米を研ぎはじめた。強すぎず、弱すぎず、米を傷つけることの無いようにと細心の注意を払いながら。右手は軽やかにリズムを刻みながら米を研ぐ。まるでひとつの音楽のように。彼は至上の音楽を奏でる。その瞳はじっと銀のボウルの中身にじっと向けられていた。

その視線の鋭さ、微塵の妥協も許さぬという意志の強さを感じさせる口元。

それだけで、彼が一流の職人であるといふことがはつきりと分かる。

なにより、あの荒れた右手こそ、常に冷え切った清水で米を研ぎ続けてきたという証明であった。

ようやく、米を研ぎ終えると、今度はカマドで米を炊き始めた。電気炊飯器ではない。己で火を起こし、火加減を自在に操り、彼は自分の思うままに米を炊き上げようとしている。

しばしの時が流れた。

そして、ついに米が炊けた。

無骨な素焼きの器に盛られた米は、甘い香りを放ち、そしてほかほかと温かな湯気を立てている。

究極の白いご飯。

日本人の心のふるせと。

そう言つても過言ではない。

彼は己の炊いた飯を見て満足そうにうなづくと、ぐらぐらと煮え立つ鍋から銀色に光る袋を取り上げ、おもむろに封を切る。そして、その白い飯の上に無遠慮に中身をぶちまけた。

その様子をじっと見守っていたアナウンサーがカメラに向かってニッコリと微笑んだ。

「以上、極安レトルトカレーの美味しい食べ方でした！」

(後書き)

ハードボイルド書きたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6732p/>

米を炊く

2010年12月30日21時16分発行